マーガレット・アーチャー『実在論的社会理論』（佐藤春吉訳、青木書店、二〇〇七年）

島崎　隆（東京唯物論研究会編『唯物論』８３号、２００９年）

著者はイギリスのウォーリック大学の社会学者であり、教育社会学の分野が専門であるようだ。彼女はロイ・バスカーが提唱した「批判的実在論」を発展的に継承するが、この学派は自分たちの国際学会も開催しているという（「訳者あとがき」参照）。さて、評者はバスカーの著作（英文）をかつて読んだことがあるが、難解で歯が立たなかったことを記憶している。社会学方法論をテーマとする本書も、抽象的で難解であり、ギデンズ、ポストモダンなどを批判の標的とする。それまでの論争の背景を知らない評者は、なかなか読みこなせなかったことをまず告白しておきたい。

評者は従来、弁証法や論理学、方法論などに強い関心をもってきており、システム論、オート・ポイエーシス論などを弁証法のライバルとして注目してきたが、本書の方法論的議論も、ヘーゲル、マルクスらの弁証法が狙っている現実認識の方法を、さらに精緻に、理論的に展開しているという印象を強くもった。だが、二部九章構成の本書は啓蒙書ではなく、そのうえ実例もそれほど挙げられない。いきなり抽象的論議を展開する専門書であるので、そのリアリティを理解するのに、かなりの程度困難を究めた。以下、評者が注目した本書の内容をかいつまんで紹介したい。

著者の基本的立場である批判的実在論は、社会的構築主義やポストモダンの主観主義・相対主義を断固排し、現実の複雑な階層的実在を客観的に認識しようとし、そうした存在論的前提を、方法論と実践的変革の立場と意図的に絡めようとする。評者はこうした態度に、弁証法的反映論に近いものを感じ、共感を覚えた。というのも、マルクス主義の弁証法的立場も、一種の実在論に立ちながら、同時に主体的変革の姿勢も強くもっているからである。

まず著者は、イギリスの経験論的傾向を背景に、方法論的議論として、そこに「個人主義」（アトミズム）と「集合主義」（全体論）の対立があったと指摘する。前者は、社会的実在を個人の活動から構築する「上向的合成論」の立場とされ、後者はまず社会的全体を想定する「下向的合成論」の立場である。著者はこの両方の立場がそれぞれアポリアに陥ることを丁寧に論証する。

ところで著者たちの世界では、弁証法ならば客体と主体というべきところを、「構造」と「エイジェンシー」（行為主体）と呼ぶ（人間のあり方は、本書では、人格、エイジェ

ンツ（行為主体）、エイジェンシー（行為諸主体）と三様に使われる）。そしてそのうえで、この両者がつねに相互作用し、一体化していることを強調する立場を「融合主義」「中心的合成論」と呼び、批判する。構造とエイジェンシーの分離不可能性をつねに強調するこの立場は、さきの個人主義と集合主義の対立をうまく克服するかに見える。だが、そこでは、行為主体にたいしては自律的かつ先行実在的であり、因果関係を客観的に内包する「構造」の存在が認められないことになる。たしかに社会的実在は行為主体によって実践的に生み出されるが、そののちそれは客観的実在となり、行為主体を逆に規定する。社会はつねに、行為主体の意図とは離れて存在しているのが現実である。批判的実在論は、時間的継起を考慮する、「階層化された見方」を対置するが、ギデンズらを批判の対象とするこのあたりの議論は、弁証法でいうと、主体ー客体の相互作用などと表現していたところをもっと緻密に議論していると思われ、説得的である。構造とエイジェンシーの両方の実在性を原理とする立場は、さらに「分析的二元論」ともいわれる。こうした実在論は、たとえば、赤ん坊の「自己」の成立をつねに社会的契機を含むものと考えようとする融合主義を批判する。つまり著者は、この立場が社会的接触のその前に赤ん坊が外的世界と直接接触する段階を無視すると批判するが、ここに一種、自然主義の擁護にもつながるものがある。これは弁証法でいうと、自然の根源性・先行性を意味する唯物論の立場ともいえよう。実際、マルクス主義においても、かつてすべてを実践と社会に還元しようとする立場が存在したが、こうした「実践の存在論」は著者によれば、明快に批判されるのである。このあたりの議論にはまことに興味深いものがある。

以上の議論は、大体、第四章までで展開されている（第六章からは第二部となる）。第五章以下は、以上の批判と実在論を基礎に、「形態生成論」や「創発性」（創発的性質）の議論をさらに複雑に展開する。創発性という表現はときどき聞くが、アダム・スミスの出したピン製造業での生産性の増大のなかに現れるように、この性質そのものは経験的に観察可能でないにしても何ら神秘的なものではなく、著者はこうした現象も批判的実在論のなかで緻密に理論化しようとする。このあたりの著者の議論は、バスカーに大きく依拠し、それを発展させようとしているが、難解である。図式が豊富に出ているので、これをヒントに丁寧に読み解くことが必要だと実感した。評者はまだ精確に読みこなせないが、形態転換、形態生成、形態安定、構造的条件づけ、文化的条件づけ、システム統合、社会統合など、さらに豊富な概念装置によって、著者は社会のありようを方法論的に把握しようとする。形態生成論とは、訳者によれば、社会の構造変革の複雑な条件を考察するとと

もに、いかなる決定論をも退け、行為主体の努力の可能性を閉じないかたちで、社会のあり方を考えるものだという。著者はポストモダンの人間主体の否定にたいしては、逆にその主体性を擁護するのである。

こうして、著者の批判的実在論はいくつも説得的な側面をもつ。評者が弁証法と関連づけて読解したように、弁証法と融合させると、より高次の方法論がそこで生まれる可能性があると思われた。この立場は、実在論的でありながら、実践重視なのである。「訳者あとがき」では、アーチャーのみならず、この批判的実在論の学派の全体の動向も紹介されており、興味深い。バスカー自身は、明確にマルクス主義の批判的深化を目指しているという。その点で、この立場は、マルクス主義、唯物論、弁証法などの領域に、おおいに刺激を与えてくれるものと期待される。昨今、評者の周囲では、弁証法などの方法論的議論は不活発になってきている。それは現在における哲学そのものの地盤沈下を意味するのかもしれないが、現実をしっかりと把握するためには、方法論的問題意識はやはり必要である。本書はたしかに硬質の抽象論理で貫かれ、読みやすくはないが、豊富な実例と対比させながらあらためて展開されれば、さらに説得的なものとなるだろう。この立場に関するわかりやすく説得的な解説書が出ることを望みたい。

なお訳者は、批判的実在論についての論文を書いているので、参照されたい（「存在論からの社会科学の刷新」、関西唯物論研究会編『二一世紀の唯物論』文理閣、二〇〇八年）。最後に、五〇〇頁にもなる大著を翻訳された佐藤春吉氏に敬意を表したい。